

わたしの聖戦

◎◎女性働くといふこと◎◎27

医学博士・医学ジャーナリスト 植田美津江

日本男性の行く末

女性雑誌が次々と創刊されている。以前はかぞえるくらいのものであったが、最近は細かくカテゴリー分けされた対象者ごとに発行される傾向があり、それは益々加速化している感がある。

女子学生向けや入社5年未満の一般OL向けのものから、明らかにキャリア豊かな女性に向けたもの、おしゃれな主婦向けのものなどその種類の多さには辟(へき)易(い)してしまふほどだ。

いずれもその内容は最新のファッションに始まり、グルメ、コスメ、ジュエリー、健康、癒(い)や)し、占い、書籍や映

画の紹介、話題の人物インタビューなどでも占められている。どの雑誌にもある占いは、同じ星占いののに、雑誌によって正反対の内容になっていることも珍しくなく、いったいどういうことかと首をかしげることも再三である。

目まぐるしく並ぶ女性誌にあきれていたら、今度は男性誌も負けじとばかりに出てきた。こちらもファッションやリラクゼーション特集、ホビー情報満載で、女性誌同様華やかである。多産多死と呼ばれるこの業界、競争の激しさも推して知るべしだが、市場が細分化

されているのは明らかで、ひとごとながら今後の動向が気になるころである。

男性の女性化といわれて久しいが、男性雑誌をみるとそれが実に顕著だ。雑誌だけでなく、福袋をめぐって長蛇の列をなす

福袋をめぐって
長蛇の列をなすのも...



変わり続けている。昔を懐かしむのは中高年の特権、言わせてもらえば正直「もっと他にすることないの」とつい愚痴が出る。男性もおしゃれでいて欲しいとは誰もが思うところだが、それはあくまでさり気ないものであるべき

の了解みたくないものが、少なくとももう少し前には毅然(き)然と存在していた。それが、化粧品だピアスだネイルアートだと、女性以上に華美になってきている。

のも、話題のブランド品に対する執着もはや女性と肩を並べるほどである。一カ月のバイト代をすべて洋服につき込む10代男性もわんさといいて、それがいいとか悪いとかといった判断を下す間もないほど急激に世の中は

しかも「慣れ」というのは怖いもので、最初の違和感はしばらくたつと何も感じなくなり、すべてが当たり前になっていく。一方で、はつきり言うて日本人男性ほど女性にやさしくない人種は知らない。……と口走り、妙

齢の男性と口論になったことがあった……。昨年来のヨソ様ブームが日本人男性(夫)に対する女性(妻)の欲求不満とあきらめが火種となつているとの見方も、あながち見当はずれとはいえない家事育児に協力なし、妻への労わりもやさしさもなしの男性が、定年になつて離婚を言い出されるのは至極当然のことである。

では、女性並みのおしゃれにうつつを抜かす最近の若い男性陣が、真にやさしいかといえればそれも違うように思う。そこには自分勝手に究極の自己満足に酔う姿しか見えないからだ。「やさしさ」とは何をいうのか明言するのは困難である。しかし男性たちよ、鏡に映る自分の姿にうつつとりするだけではその若さがもつたいてない。だって世界はとてつもなく広いのだから。

イラスト・三浦義雄